

● 「風船爆弾」の第一科

○ 風船爆弾

当時の日本では、アメリカ大陸まで飛行できる長距離爆撃機は開発されていなかった。そこで、B25爆撃機などによる空襲の対抗手段として、クローズアップされたのが関東軍がソ連に対して行なっていた気球作戦である。

1942(昭和 17)年、いったんは断ち消えになっていた風船爆弾を、陸海軍は遠距離空襲用の決戦兵器として採用することを決定した。この研究・開発の中心になったのが陸軍登戸研究所第一科である。この作戦は、風船爆弾の頭文字をとって別名「ふ号」作戦とも呼ばれた。

この、「国運」をかけた決戦兵器「風船爆弾」は、予算2億円で約2万個を生産する計画であった。1943(昭和 18)年に実験第一号が完成、その後1944(昭和 19)年の11月から翌年の3月までのあいだに、約9300個が国内の三カ所(千葉、茨城、福島)の発射基地からアメリカ大陸に向けて放球され、そのうち約1000個がアメリカ大陸に到着した。この風船爆弾により、アメリカではオレゴン州で一家6人が死亡したという。この一家6人が、日本軍によるアメリカ本土攻撃の唯一の犠牲者であった。

風船爆弾は、和紙をコンニャク糊で張り合わせ、気密にした直径10メートルの紙風船に、時限信管をつけた爆弾と焼夷弾を搭載、1万メートル前後の高度で偏西風に乗せ時速約250キロメートルで太平洋を二昼夜半で飛ばし、1万2000キロ隔てたアメリカ大陸を攻撃するための兵器だった。

アメリカではすでに原子爆弾の研究が完成されようとしていた時期に、和紙で作った風船爆弾は滑稽に思えるが、高度維持装置やラジオゾンデ(高層気象観測用無線発信器)などの技術は、当時世界のトップレベルにあったこと、和紙を使用したのは気

球の膨張からくる破裂を防ぐためにあえて採用されたことなどを考えると風船爆弾に対する認識は変わってくる。和紙製はゴム製よりも軽く上昇速度が速く無風状態でも放球できた。水素ガスがもれたり夜間や高空の低温のため気球の高度が下がると、高度計が感知しバラスト（おもり）が自動的に落とされ高度を維持する。そしてちょうどすべてのバラストを使い切った時にアメリカ国内に到着し爆弾を投下するという仕組みになっていた。

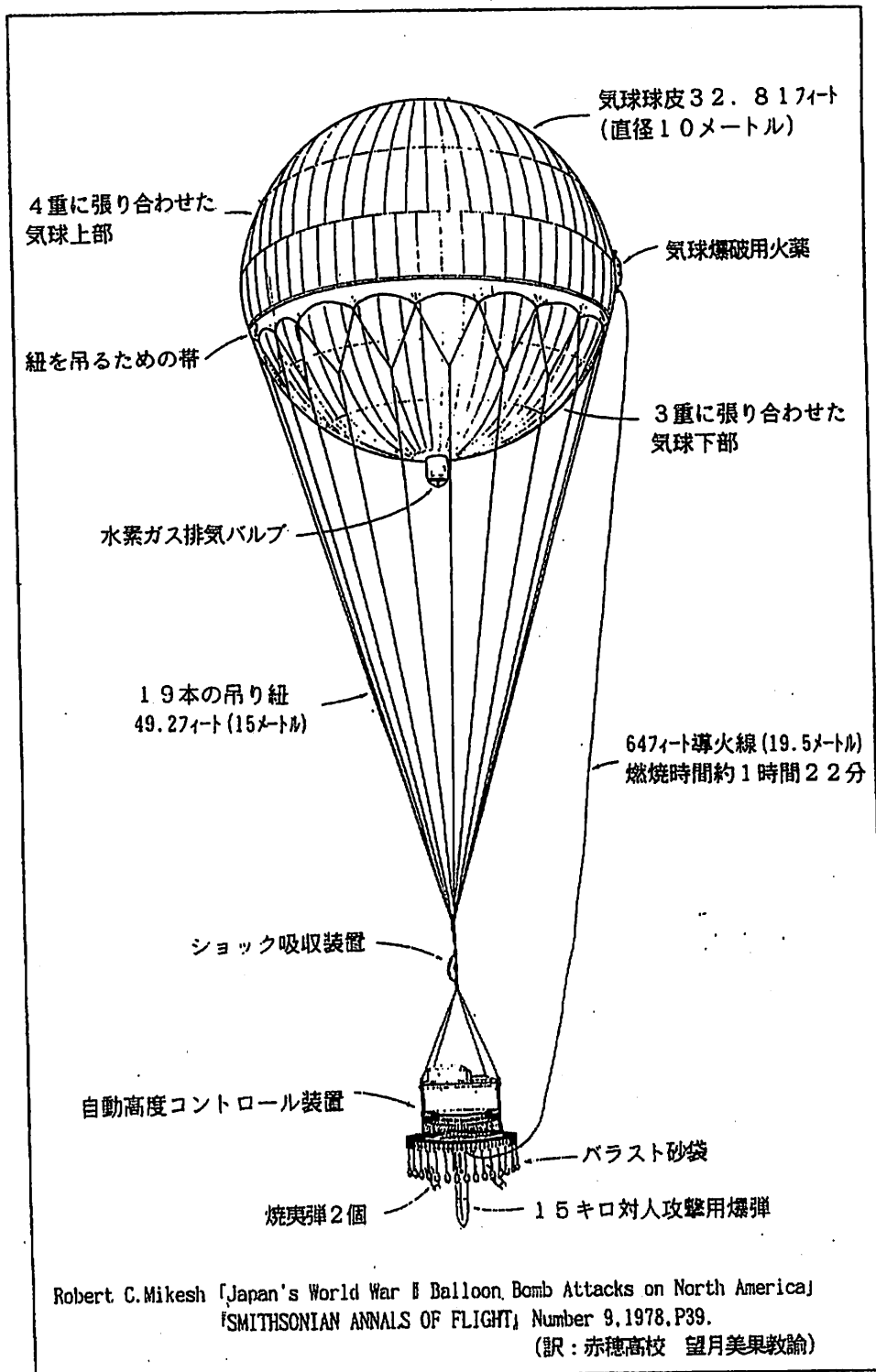
当時のアメリカの参謀長も、「世界で初めて飛び道具が人間に導かれなくて海を渡った。それは大損害をもたらす可能性があった」と述べている。戦後アメリカがこの風船爆弾で細菌や毒ガスなどの化学兵器が使われることを極端に恐れていた事実がわかった。

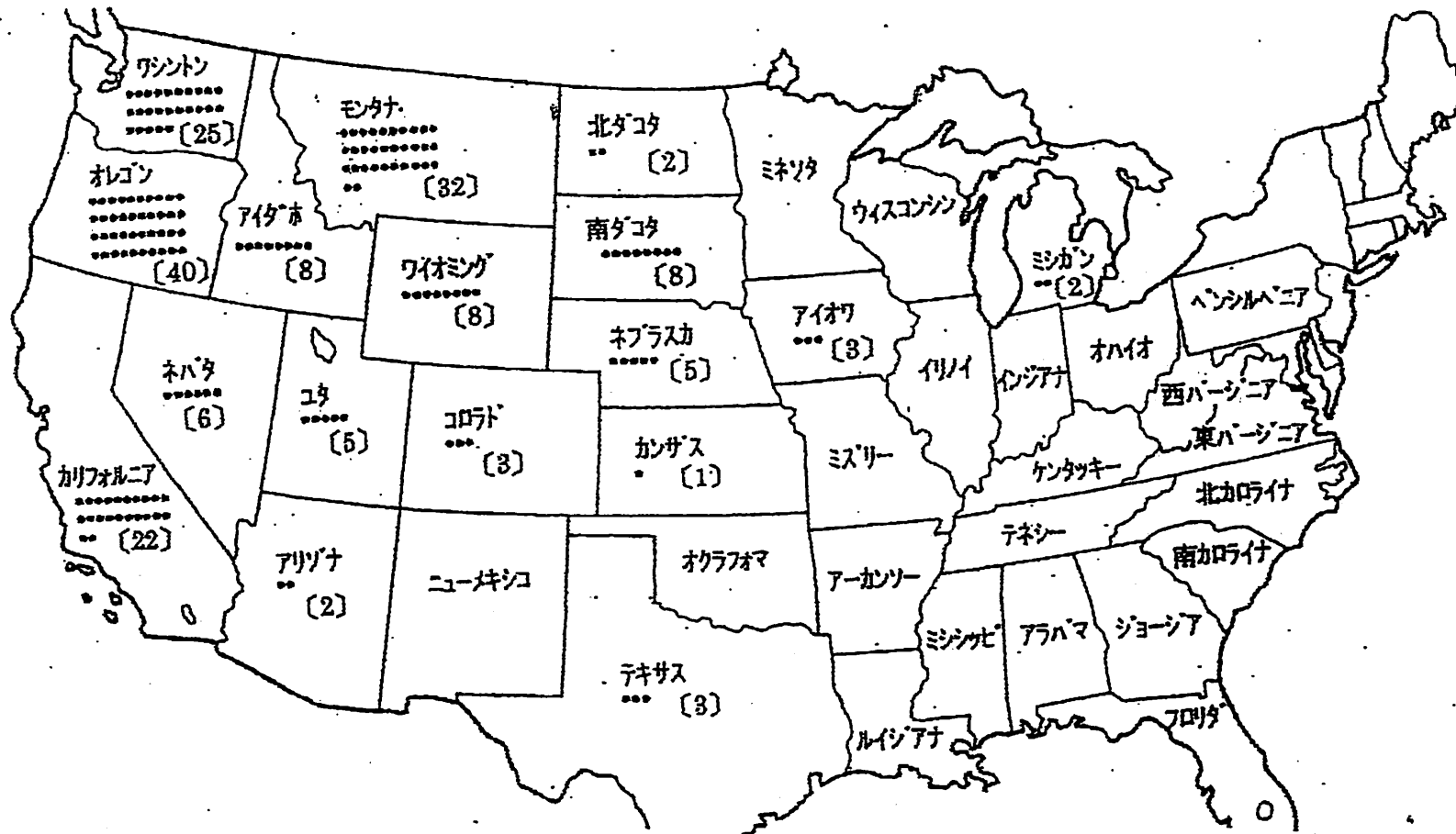
陸軍登戸研究所の第二科では、牛の死亡率の高い「牛疫」の感染実験の韓国国内での成功を受け、1944年（昭和19）年「牛疫病毒を風船爆弾に積載するかどうか」の参謀会議もひらかれたが、アメリカの報復をおそれてその計画は実施されなかった。

○電波兵器

強力な超短波を武器として使用する（いわゆる殺人光線のようなもの）の研究も最後の決戦兵器として研究されていた。10メートルの距離でウサギを数分間で致死させる実験までは成功していたが、研究所の疎開などもあり、兵器としては完成はしなかった。

風船爆弾全体図





アメリカ軍に確認された風船爆弾 (「スミソニアン博物館資料」より作成)

〈この他カナダで78・アラスカで24・メキシコで2・ハワイで1・その他5が確認されている〉